

主 題：すべての人に知ってもらいたい知らせ  
聖書箇所：

いろいろな所を訪問するたびに、それがどこであっても、主が救われる人々を起こしておられることを知るとき、非常に大きな励ましを受けます。この夏も島根で、礼拝出席者が数名の小さな教会で奉仕をしました。何かの励ましになればと思っていたのですが、逆に大きな励ましをいただく機会となりました。というのはこういう信仰者と出会ったからです。そのご夫妻は非常に仏教の強いその地域にあって、イエス・キリストを信じ救いをお受けになりました。浄土真宗の門徒総代であられた方ですが、イエス・キリストを信じる決心をして、そのことをお寺に明らかにしたのです。それは大変なことだったと思います。そのとき、お寺からこんな内容の手紙がきたそうです。「宗教の本質は親鸞聖人を信じたりキリストを信じたりすることでは断じてありません。親鸞は当時の体制的仏教と権力者によって弾圧され流罪にされてまで、イエス・キリストは死刑にされてまで守り抜いたもの、それを普遍原理とって良いと思いますが、その普遍原理に逢着するために親鸞をキリストを手がかりとして求め学ぶことがその目的なのです。あなたがたはキリストが目的となっている、目的ではだめなのです。キリストが方法、手がかりとならなければ。」と。それで彼らは次のような手紙を送り返しました。「キリストを目的としているところに私たちの間違いがあるのご指摘がありました。私たちには宇宙万物と人類すべての創始者、神はすなわちイエス・キリストであり、これこそ普遍原理なのです。聖書の中に「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」とあります通り、キリストが目的そのものなのです。この世の一般常識を抛り所とし、人の評価のみを価値ありとして生きて来た私たちが、それは真の生き方ではないのだと心の目を開かれ、その結果、価値の転換がなされ新しい生き方への生ける喜びが与えられました。」とすごいことを言われたのです。今の私たち、この大阪に住んでいる者たちにとってはさほど大きなことでないかもしれませんが、お寺が中心になっているその場所において、このようなことを言われるのです。また、このようにも書いていました。「私たちはキリストこそ真理であると確信し得たからこそ心の救いが得られたことは、動かすことのできない事実であります。」と。確かに教会に集まっている人数は少ないですし、クリスチャンの総数も非常に少ないでしょう。しかし、神はこのような信仰者を立てておられ、その人たちを使ってイエス・キリストのすばらしい救いのメッセージを伝えようとしておられること、それは大きな励ましでした。

同時に、そのようなときに自分自身の伝道に対する姿勢や熱意というものを考えました。自分はこの人たちのように恐れることなく大胆にキリストの救いのメッセージを語り続けているのかどうか、どこかに恐れがないかどうか、そのようなことを考えました。そして、その時に考えたことは自分のしもべに財産を託して旅に出かけた主人の話です。マタイ25章に出て来ます。その中である人たちは忠実な良いしもべと言われました。しかし、ある人は悪い怠け者のしもべと言われるのです。その違いはどこにあったのでしょうか？良い忠実なしもべだと言われた人々というのは、主人から託されたものをできる限り積極的に有効に用いて、主人に利益をもたらした者たちです。だからほめられたのです。ところが悪い怠け者のしもべといわれた人物は、託されたものを地に埋めて何の利益ももたらさなかつた者です。皆さんご存じの話です。この話を考えるとき、私たちクリスチャンが決して忘れてはならないことを教えてください。というのは、私たちイエス・キリストを信じている一人ひとりというのは、神から託された務めがあるのです。イエス・キリストを信じたあなたには神が大切なものを託してくださった、それは信じる者に罪の赦しをもたらすこの救いのメッセージを人々に伝えるという務めです。山上の説教でイエスはこのようなことを言われました。「あなたがたは、世界の光です。」と、これはイエス・キリストを信じて救われた人の身分を明らかにしたのです。神の光を反映する者だと言います。そして、この後にこう続きます。「**山の上にある町は隠れる事ができません。：15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。**」、マタイ5：14-15のみことばです。つまり、私たち世界の光とされた者は隠れていたらいけないのです。神の光を周りの人々に明らかにして行くのです。その務めをあなたは神からいただいているのです。これは私たちがもうすでによく知っていることです。キリストのすばらしいメッセージを伝えて行くということ…。しかし問題は、かつてはそうだったけれど今はどうか、これまで以上にその務めを熱心に行っているかどうかです。J・I・パッカーという神学者はこのように言います。「できる限りの方法で伝道に献身しない者は、イエス・キリストの良い忠実なしもべの役割を果たしていない。」と。非常に厳しいことですが真実です。彼は続けてこう言います。「キリストのご命令、全世界に出て行くとはあらゆる人々にあ

りとあらゆる方法で福音を知らせるという課題のために、すべてのものがそれぞれの独創力や企画力をすべて捧げなければならないということである。伝道に対する無関心と怠惰は常に弁解の余地がないのである。」と。私たちは一生懸命考えてどのようにすればより多くの人々にこのすばらしい救いのメッセージを伝えて行くことができるのか、そのことを考えなければいけないのです。神にすべてをささげて神の知恵をいただきながら、熱心にこのメッセージを伝え続けて行くのです。しかし、もし私たちがそれに対して無関心であったり怠けているなら、弁解の余地はないし当然私たちは良い忠実なしもべではないと言っているのです。

皆さんどうですか？私は正直、この夏の間考えたことは自分自身が良い忠実なしもべかどうかです。なぜなら、私にはメッセージが託された、務めが託された、その務めを私が忠実に果たしているかどうか、これは私の責任です。そして、同じ責任が皆さんにもあるのです。私たちが良い忠実なしもべとして託された務めを果たし終えるためには、今一度自分自身の日々の過ごし方というものを考えてみる必要があります。どのように毎日の時間を過ごしているか、私たち自身そのことをしっかり吟味することが必要です。それをするために、このみことばは私たちに様々な見本を残してくれています。その中の一人が私たちの愛するパウロです。信仰の先輩であるパウロがどのように生きて行ったのか、彼はどのように言いました。Ⅱテモテ4：6－8「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。：7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。：8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」、これがパウロの信仰者としてこの世の働きを終えるときに、自分の信仰の歩みを振り返って言ったことです。私はやるべきことをやった、私は神から託された務めを忠実に果たしてきた、とそのように彼は生きたのです。彼こそまさに良い忠実なしもべだったのです。そうして人生を終わって行くのです。

この偉大な人物がどのように生きたのか、どのように伝道していったのか、私たちは今からそのことを見て行きます。みことばを通して、パウロがいったいこのすばらしいメッセージを伝える者としてどのように生きたのか、そのことに関して二つのことを見ます。一つは彼がどのようなメッセージを語ったのか、彼のメッセージを見ます。もう一つは、そのメッセージをどのように語って行ったのか、そのことを見て行きます。

## ☆パウロの生き方、伝道を見る

### I. パウロが語ったこと

I コリント1：23に「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」とあります。このことが明らかにすることは、パウロは主イエス・キリストについての真理を語ったのです。一言でいうならそれが彼のメッセージであり、メッセージの内容でした。もう少し細かく見るなら、彼が語ったことは、このイエス・キリストこそ人となられた創造主なる神だと言ったのです。同時にパウロは、このイエス・キリストを信じる者はその人の罪を完全に赦すことのできる唯一の、そして、待望の救い主であるということを明らかにしました。そして、イエスがそのような人物であることの証拠としてパウロが述べたのは、イエス・キリストの十字架であり、イエス・キリストの復活なのです。パウロは主イエス・キリストの真理を語り続けたのです。この23節を見ると「十字架につけられた」とありますが、パウロはここで完了形を使うのです。というのは、確かにパウロの時代でももうすでにイエスは数十年前に十字架に架かっていたのです。今の私たちからするともう2000年前のことです。しかし、イエスが十字架に架かることによって可能にされた救いのメッセージは、その当時のある人たちのためだけではなくたのです。そのメッセージは時代を越えてすべての人々に届いているのです。パウロが語りたかったこと、パウロが人々に語り続けたことは、確かに、イエス・キリストは数十年前に十字架に架かって死なれたけれど、あの十字架によってもたらされた救いは、時代を越えて今の私たちにも大きな力をもっているということです。どんな罪人も完全に赦す力があるのです。そのことを語り続けたのです。

ところが、それを聞いていたその当時の人々はそのメッセージを受け入れようとはしませんでした。ユダヤ人を始めギリシャ人、つまり異邦人もこのメッセージを受け入れようとしなかったのです。1節前の1：22を見てください。「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシャ人は知恵を追求します。」とあります。ユダヤ人たちはなぜしるしを求めたのか、それは彼らは神は様々な奇蹟を行なえるお方であると信じていました。そこで彼らはイエスが神であることを主張したときに、ではその証拠を見せてくださいと奇蹟を要求したのです。ヨハネ6章にそのことが記されています。6：30「そこで彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるために、しるしとして何をしてくださいますか。どのようなことをなさいますか。」と、これがユダヤ人だったのです。ところが彼らはいくら奇蹟を見ても信じようとはしないのです。同じヨハネの10：25－26を見るとそのことが記されています。「イエスは彼らに答えられた。「わたしは話し

ました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行なうわざが、わたしについて証言しています。：26 しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。」とここまでイエスははっきり言われました、「父の御名によって行なうわざ」、奇蹟のみわざによってわたしがだれであるかを明らかにする、しかし、あなたがたは信じませんと。ですから、ユダヤ人たちはしるしを見せてくださいと言いながらそのしるしを見ても信じなかったのです。このような人々をパウロ自身も相手にしていたのです。異邦人はどうだったのでしょうか？ギリシャ人は知恵を追求すると言いますが、このコリントの人々、ギリシャ人は教育のある批判的な異教徒で何事についても一応耳を傾けるが、決して信じようとしなない人々です。パウロがアテネに行った時のこと、覚えておられますか？使徒の働き17章にあります。パウロはアテネに行きそこで多くの哲学者たちに会います。それが18節に出て来ます。「エピクロス派とストア派の哲学者たちも幾人かいて、パウロと論じ合っていたが、その中のある者たちは、「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか。」と言い、ほかの者たちは、「彼は外国の神々を伝えているらしい。」と言った。パウロがイエスと復活とを宣べ伝えたからである。」とパウロはイエス・キリストの復活の話をしていました。それを聞いていたギリシャ人たちはこう言います。「：19 そこで彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行ってこう言った。「あなたの語っているその新しい教えがどんなものであるか、知らせていただけませんか。：20 私たちにとっては珍しいことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなものか、私たちは知りたいのです。」：21 アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。」、彼らは何か新しいことが聞けたらいい、しかし、聞いて信じるのではない、ただ聞いて日を過ごしていたのです。パウロは彼らにメッセージをしましたが、どんな結果があったか、みことばが明らかに教えています。32節「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう。」と言った。」と、つまり、このギリシャ人たち、異邦人たちはパウロの話聞いてあざ笑うのです。彼らは語ってくれと言いながら心を開いていないのです。いったいどこに真理があるのかなど考えてもいないのです。彼らは結局信じようとしません。ユダヤ人も異邦人も、彼らは信じたくないのです。しるしを見せてくれと言うのも口実なのです。彼らは自分自身の意志によって救いを拒んでいるのです。ユダヤ人たちはどうしてイエス・キリストの救いを受け入れられなかったのでしょうか？彼らにとって十字架は受け入れ難かった、彼らの考えるメシヤはこのようなのろわれた十字架で殺されるようなお方ではなくて、敵を打ち破る力に満ち溢れた方であると信じていました。だから、これから十字架に架かって死にますと言っている人物を救世主として迎えることはできなかったのです。自分たちの考えるメシヤ像と違うから拒んだのです。結局、彼らは真実を追究しようとしたのではない、自分たちが考えること、自分たちの信じるのが真実であるとした、そのような頑なさゆえに、彼らはこの救い主を拒んだのです。ギリシャ人も同じでした。十字架に架けられたイエスのメッセージを、そして、その死からよみがえられたイエスのメッセージを繰り返し語っているパウロの話に対して、これには余りにも知恵がない、もっと自分たちにふさわしい、関心を引く知的な話をしてほしいと言って、福音のメッセージを拒むのです。ユダヤ人と同じです。つまり、自分たちが期待しているメッセージではないからです。

これらは今でも同じです。これほどすばらしい神の救いのメッセージが明らかに示されているのに、私たちのすべての罪が完全に赦されるというこんなにすばらしい救いが神によって備えられているのに、なぜ人々はこの教えに耳を傾けないのか、なぜこの救い主を受け入れないのか、私たちは思います。なぜ人々は余りにも頑なでこのすばらしい救いを拒み続けるのか？と。その原因はユダヤ人や異邦人と全く変わりません、つまり、自分の考えと違うから、自分の考える救いのメッセージ、天国への道と違うからです。ある人はこのように言います。どんな人でも信じるだけで救われる、これは信じ難いことだと。そのように言う人は自分の行ないや自分の功績を重視する人たちです。もっとも徳を積まなければいけない、そうすることによって罪が赦され天国に行けるのだと。このように考えている人たちには、イエスの十字架と復活を信じる、この福音のメッセージを信じるという単純なことは、それではだめだ、それはおかしいとして受け入れないのです。この福音のメッセージは誰にでも分かる、子どもでも分かる単純なメッセージです。自分には知恵があると自負している者には、このメッセージは余りにも単純で愚かに見えるのです。そんな簡単に信じるだけでと…。また、ある人々は、主に救いを求めて素直に出てくる人がどちらかというと弱い人が多いことから、人間は高慢ですから自分の限界に直面しないと心を開かない、直面しても開かない人が多いのですが、どうすることもできない境遇に追いやられたときに初めて私たちが心を開くケースが多い、そのようなことから確かに、教会は弱い人が多いことも事実です。そうするとある人々は、教会に来ているのは病人であったり裕福でなかったり高学歴でなかったりするために、自分に自信をもっている人々、自分を誇り高ぶっている人々はこのようなメッセージは自分のものではない、これは弱い人のためのものであって自分には関係がないと…。だから、どの時代でも同じです。結局人間というのは、自分の考えるメッセージ、自分の考える救いの道、自分

の考える救い主、それと同じでなければ信じないというのです。誰一人として救い主の前に、神の前に謙虚になろうとしないのです。自分を神とし自分を誇っているのです。この高慢さのゆえに、自分の意志によってこの救いを拒んでいるのです。人間の歴史は同じことを繰り返しているのです。

人々が知恵を要求する、そのような現実と直面したとき、私たち福音を語る者も聞く人に感銘を与えることや、人々が感心するようなことを語らなければならないのではないかと、彼らが聞きたくない十字架のことよりももっと知的に語らなければならないのではないかと、そのような誘惑があることも事実です。そういう誘惑に負けてしまうと肝心のメッセージから外れてしまうのです。皆さんはどうお感じになるか分かりませんが、日本のテレビでもキリスト教の講座というのがあります。そのような講座を見てある人はキリスト教は知的なものだと思ふかもしれません。しかし、私たちが考えるべきことは、そのようなメッセージを神は私たちに託されたのかどうかです。私たちはこの世の知的な人々に対して彼らを納得させるようなメッセージを語ることを、神は私たちに要求しているのかどうかです。パウロ自身にもこういう誘惑があったでしょう。なぜなら、そういう哲学者が周りにたくさんいたからです。コリントの町に来てパウロはそこで1年半生活したのです。では、そういう誘惑の中でパウロはどんな結論に達したのかです。知的なことに関心のある人々の中において、そのような環境はパウロ自身のメッセージに何か変化をもたらしたのでしょうか？パウロの証をみてください。Iコリント2：1からこのように言います。「さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。」と、知恵を愛する人々の中に行ってもパウロは自分の知恵を用いて彼らを納得させようとか、彼らの関心を引こうとはしなかったのです。なぜなら、続く2節でこのように言います。「2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。」と、つまり、パウロがここで言うことは、どんなに人々が知恵に関心があったとしても、私に神が託されたメッセージは、この十字架に架けられたイエス・キリストのことを語る、これが語らなければならないメッセージである、それこそ人々が知らなければならないメッセージであると、その確信に満たされたパウロはどのように語り続けたのです。イエスに関する真理を伝え続けたのです。最初に読んだIコリント1：23をもう一度みてください。「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」とこの「宣べ伝える」ということばは大切です。これは「布告する」ということです。つまり、パウロは自分で自分が語りたいメッセージを伝えたのではなく、自分に託されたメッセージを伝えたというのです。それがパウロが行なったことだったのです。神から託されたメッセージを人々に布告する者、それが自分だ、それが自分の責任だと言うのです。だから、人に受け入れてもらうために、感心してもらうために、自分が知的であることを認めてもらうために語ることがあってはならないのです。パウロは言います。人々が自分のことをどのように見るか、そんなことはどうでもいい、私の責任は神が私に託されたこの神のメッセージ、このイエス・キリストのことだけを語るのだ、それが神が私に望んでいることだと。非常に大切なことをパウロは私たちに教えてくれたのです。私たちにもそのような誘惑があるからです。何となく人々に感銘を与える話をしなければいけないとか、彼らが感心するような話をしなければいけないとか…。心配しなくてもいいのです。私たちの責任はこの神のおことばを忠実に正しく語ることです。私たちクリスチャンが気付かなければいけないことは、確かにこの世の中に知恵のある人はたくさんいます、彼らはその知恵を用いてコンピューターや車を作り、ロケットを飛ばしたりしますが、この世の知恵には限界があるということです。ロケットを飛ばすことはができて、その世の知恵によっては神を知ることにはないのです。彼らは言います。この世界は偶然にできたのだ、この世は進化したのだと。それはこんなに時代が進んでもまだ一つの学説でしか、進化論としか言えないのは、それが事実でないから矛盾がいっぱいあるからです。しかし、この世の知恵ある者たちが出した結論はそうです。この世の知恵では神を知ることにはない、この世の知恵は罪の赦しを与えることはできないのです。どんなにこの世の知恵をもってしても、私たちはこの罪から解放されて永遠の赦しをいただくことはできません。そのことを思いつくこともできないのです。人の心の問題についても本当の答えを世の知恵は与えることはできません。人の悩みに答えることはできないのです。永遠についてもこの世の知恵は答えを与えることはできない。だから、私たちは気付かなければいけない、私たちはこの世の知恵で人々と話をするのではなく、神の知恵をもって彼らに話すことです。古代ギリシャの哲学者プラトンもこう言っています。「人間の知恵は価値のないものである。かえって人は神の知恵を求めべきである」と。

私たちに託されたのは神のメッセージです。そのメッセージを忠実に伝えて行くことです。このみことばを語り続けて行くのです。ですから、私たちは日曜日に神のおことばをできるだけ忠実に語ろうとしているのです。なぜなら、このみことばが語られるときそれは伝道になるからです。J・I・パッカーはこのように言います。「日曜礼拝での説教が聖書的である限り、それは必然的に伝道的である。伝道説教そのものに特別な形や取り決めがあって、説教のうちでも特別なものであると考えるのは間違いで

ある。伝道説教は聖書的説教そのものである。なぜなら、聖書にあることはまさに人間の救いに対する神のみこころ全体だから。」と。そうです。私たちはこの神のおことばによって神を知ることができるのです。神の計画を知ることができるのです。これから何が起るのか知ることができるのです。どうすれば自分の心の問題を解決できるかを知ることができるのです。どうすれば罪の赦しを得て天国に行くことができるのか、知ることができるのです。この世の知恵では得ることのできない答えを神は聖書に記してください、だから、みことばが必要なのです、みことばを正しく学ぼうとするのです。

クリスチャンとしての私たちの責任は何か？パウロが教えてくれました。パウロは知恵を愛する人々の中であって、知恵を要求する人々の中であって、しるしを求める人々の中であって、同じメッセージを語ったのです。イエス・キリストがだれなのか、人としてこの世に来られた神であり、このイエスを信じる人には間違いなく、例外なく罪の赦しが与えられると、このメッセージを語り続けたのです。そのメッセージこそあなたや私に神が託されたメッセージそのものです。

## II. どのようにパウロは語ったのか

もう一度 I コリント 2 章を見てください。3-5 節「**あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。:4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでした。:5 それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。**」、パウロはこの大切なメッセージをどんな態度で伝えたのか、大切なことを三つ教えています。そのことを簡単に見て行きましょう。

### (1) 自分の弱さ、無力さをしっかり認めること

パウロは言っています。「**あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く**」と、この弱いというのは病弱だからだが弱いというわけではありません。その後の「**恐れおののいて**」と関連しています。つまり、パウロはここで、あらゆる面において私は弱い存在だ、ただの人間に過ぎないと言っているのです。パウロは自分の弱さをちゃんと知っていたのです。どんなに頑張ろうとしてもどんなに決心しても失敗を繰り返す、罪深い者だと。ですから、パウロはまず自分の本当の姿、弱く無力だということを覚えているのです。そして「**恐れ**」と続きます。これは人に対する恐れではありません。パウロほど勇敢に人々の前で語った人物はいないからです。これは、神から託された務めを十分になせないのではないかとということへの恐れです。神が自分に託してくださったその仕事を私は果たせないのではないかと、そのことに対する恐れをパウロはもっていたのです。彼は自分の弱さを知ってそれを認めていました。

### (2) 主の前にへりくだる

「**恐れおののいていました。**」と記されています。このことばは次のところにも出て来ます。II コリント 7 : 15 「**彼は、あなたがたがみなよく言うことを聞き、恐れおののいて、自分を迎えてくれたことを思い出して、あなたがたへの愛情をますます深めています。**」、またピリピ 2 : 12 「**そういうわけですから、愛する人たちが、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。**」。エペソ 6 : 5 を見てください。「**奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。:6 人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、:7 人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。**」と、これは奴隷たちが真心をもって主人に仕えて行くこと、どのような心の態度をもって仕えて行くべきなのか、そのことを教えています。パウロは奴隷たちに、あなたがたはへりくだって主に仕えるようにあなたたちの主人に仕えなさいと、へりくだることの大切さを教えたのです。これは大変に難しいことです。どうすればいいのか、同じエペソ 5 : 18 に「**また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。**」とあります。御霊に満たされたならあなたは仕える者になると教えます。妻たちは夫に、夫が妻たちに、そして子どもたちが両親に、そして奴隷は主人に…と続いて行きます。ですから、私たちが本当にへりくだって仕えて行こうとするには何が必要か、三つ目です。

### (3) 神の助けによって歩むこと

言い換えれば、聖霊に満たされることです。つまり、へりくだって行くというのは自分たちの力では無理なのです。神の助けが要るのです。奴隷たちが本当に主に喜ばれる働きをなすために必要なのは神の助けです。あなたや私にとっても同じことです。パウロは II コリント 12 : 10 で「**ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。**」と言いました。私たちを通して神の力が働くのですが、それを邪魔するものがあります。自分自身、自我です。ですから、神に働いていただくためには自我を捨てて行くことです。神に委ね切ったもの、神に働いていただくもの、その人こそ強いとパウロは言うのです。皆さんもよく覚えておられるイザヤ 40 : 28-31 のみことばを思い出してください。「**あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。:29 疲**

れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。:30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。:31 しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」と、高く舞い上がって行く鷲は鳩のように一生懸命羽ばたきをしていません。谷から湧き上がってくる上昇気流に乗って高く上って行きます。つまり、私たちの信仰の歩みにおいても、神の力をいただきながら力強い歩みをして行くために必要なのは、私たちの力以上に私たちを持ち上げてくださる神の力に、その恵みに自らを委ねることです。なぜなら、神の力によって私たちがことを為して行くとき、神が栄光をお受けになるからです。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」とパウロがピリピ4：13で言うように、神の力によってできることを知っていたのです。

私たちは語るべきメッセージが分かりました。問題はどのような態度でそれを語るのかです。気を付けなければいけないことは、私たちは伝道するとき、イエスを信じますという人が起こされて行くと、何か私たちが特別な賜物をいただいたかのように、私たちが人を救えるかのように、勘違いしてしまうことです。人を救われるのは神です。私たちの責任は神のおことばを正しく伝えることであり、そのとき、メッセージを聞くすべての人がこのイエス・キリストを信じて救いに与ってほしいという、強い願い、祈りをもって、語り続けて行くことです。それが私たちの責任です。パウロがすべての人が救われてほしいと願って語ったように…。ローマ1：14-16に「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならない負債を負っています。:15 ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と、ここに救いがあること、これこそ人々が知らなければならない大切なメッセージ、最も重要なメッセージであるから、パウロはそれを語ろうとしたのです。そして、パウロはことばだけでなく彼自身の生き方をもって伝道しました。ピリピの牢獄にいたとき、看守たちを感動させたのは、明日殺されるかもしれない状況にあってパウロたちは賛美をするのです。神に感謝を捧げている、そのような様子を見た人々はなぜ？と、そして、その看守は家族とともにイエスを信じるというすばらしい奇蹟を見ることができた、つまり、パウロはことばだけでなく生き方をもってキリストの証をしたのです。

最初に見た、山上の説教マタイ5：14-15でイエスは「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。:15 また、あかりをつけて、それを柀の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。」と言われましたが、その続きにこのようにあります。

16節「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と、つまり、私たちに大切なことは私たちがメッセージを大胆に明確に正確に語って行くことだけでない、私たちがどのように生きるかです。イエスはそのように言われたのです。私たちが神の愛を説くのなら神の愛を実践することです、失敗をしても。私たちが神の赦しを説くのなら赦し合うことです。そして、行ないの方がことばよりも力があります。説得力があります。最後に、ウイリアム・バークレーはこのような話を上げていました。「ある男がいた。彼は飲んだくれの放蕩者であった。ところがキリストに捕らえられてしまったのである。彼の仕事仲間がそれを知って、その信仰をぐらつかせようとした。君のように常識のある人間が聖書に書いてあるような奇蹟を信じられるわけがないじゃないか。たとえば、イエスが水をぶどう酒に変えたなどと、どうして信じられるのか。すると彼は答えて言った。『イエスが水をぶどう酒に変えたかどうか、そんなことはどうでもいい、ただはっきりしていることは、僕の家の中でイエスが酒を家具に変えてくださったということさ。』金を酒にだけ費やしている人間が酒を止めて家具を買う、自分の生活にそのような変化が起こったと。だれもこのような変化に対して反駁できる者はいない。私たちの生活によってキリストを示そうとせず、議論によって人々をキリスト教に導こうとばかりするのは、私たちの弱点である。誰かが言ったように、聖徒とはキリストがその心の中に再び生きておられるような人を言うのである。」と。私たちの心の中に主が生きておられ、その主が私たちの生き方を変えて行ってくださる、私たちはこのすばらしい主を証するのです。

良い忠実なしもべ、それは与えられた務めを忠実に果たす者です。あなたには大切な務めが与えられています。私たちにすべての人に知ってもらいたい知らせがあるのです。そのメッセージを出て行って語ることです。そのようにこの1週間も歩んで行きましょう。